

百姓・字根・豊と
考える農の哲学



A-は百姓になれるか

もくじ

1 私の青年時代の目覚めを語りたい

19

1話

「減農薬」という言葉はなぜ生まれ、なぜ広がったのだろうか？

20

— COLUMN — 「虫見板」の発明と驚き

26

2話

なぜ「減農薬」は百姓からは歓迎されたのに、農水省からは嫌がられたのか？

28

3話

「害虫」のほとんどは「害」にならない？

32

4話

なぜ「ただの虫」が一番多いのか？

35

5話

農薬のほんとうの怖さとは何だと思う？

39

2 百姓仕事って、楽しいの？ 49

1話 なぜ「草とり」が一番楽しいのか？ 50

2話 百姓が生きものと話をしてしまうのはどうしてか？ 53

3話 「草にことづて」する感覚はどこにいったのか？ 57

4話 百姓仕事の主役は百姓ではないのか？ 60

— COLUMN —
「稲の声」を聞く百姓と、
聞こえる百姓の違い 64

5話 我まで忘れて仕事する意味は、どこにあるのか？ 67

6話 天地自然と一体になることは可能か？ 71

3 百姓は、生きものをよく殺すけど？

75

1話

百姓はこれほど生きものを殺しても、なぜ悩まないのか？

76

2話

「殺すために育てる」ことは、人間をどう変えたのか？

80

3話

お玉杓子がいなくなると、なぜ百姓は「さびしい」と感じるのか？

83

4話

「また会える」と、どうして確信できるのか？

86

— COLUMN —

作物は女神の「死体」から生まれた

89

5話

生まれてくる時はすぐに気づくのに、死んでいく時を知らないのはなぜ？

93

6話

もし田んぼに稲以外の生きものがいなかったらどうなるか？

96

7 話 牛や豚や鶏の「殺処分」とは、異常ではないのか？ 100

— COLUMN — 翅のない天道虫をつくる傲慢さ 103

4 仕事よりも技術が大切な？ 107

1 話 「畦塗り」は農業技術か？ 108

2 話 「手入れにまさる技術なし」とはどういうことか？ 112

3 話 「米作日本一」は何を目指したのか？ 114

4 話 「技術」になると失われるものは何か？ 118

5 話 百姓仕事は「労働」なのか？ 123

6 話 「農薬使用」という「農業技術」の
ほんとうのねらいは何か？ 128

7 話

専門家と百姓はわかりあえるのか？

130

8 話

「自然主義」ではとらえられないものとは何か？

134

5

A I は百姓になれるか？

139

1 話

A I に「生きものの調査」を
させたらどうなるか？

140

2 話

百姓仕事をA I に任せてよいのか？

145

3 話

「無意識の知（経験の知）」はA I に搭載できるか？

149

4 話

草の名前を呼ぶのは何のため？

152

5 話

無意識にしてしまう百姓仕事とは
どういうものか？

156

6 農耕って、人間のためのものなの？

161

1話 「農耕」と「採集」は断絶しているのか？

162

2話 なぜ人間は「農耕」を始めたのだろうか？

166

3話 「手入れ」は人間の心に何をもたらしたのか？

170

4話 世界で一斉に農耕が始まったのはなぜか？

174

5話 水田稲作は変なものだった？

177

6話 農耕はなぜ、なかなか広がらなかったのか？

182

7話 「農耕」の始まりは、不幸の始まりだったのか？

186

— COLUMN —

「た」の「土」の黒さは

豊かさの象徴

190

8話

社会に埋め込まれてしまった「サ神」とは？

192

COLUMN

「百姓」という言葉の歴史

196

7 農らしさって、何だろう？

201

1話

農政は、どうして

202

「農らしさ」の本質が見えないのか？

2話

除草剤をまいた耕作放棄地の風景に
違和感を抱くのはなぜか？

206

COLUMN

「有機農業」は農らしい農であれ

208

3話

「人工田んぼ」は農か？

211

4話

「野の学」の可能性はあるのか？

214

5話 なぜ「野の学」でない?
「農の原理」は理論化できないのか? 217

COLUMN 「百姓ことば」と「農学用語」 220

8 農って食料生産だけなの? 225

1話 「農業とは食料の生産である」
という定義は正しいのか? 226

2話 「農」に「無駄なもの」がない理由は何か? 230

3話 赤トンボを育てる農業技術はなぜないのか? 233

4話 「落ち穂拾い」はめぐみの返し方か? 239

5話 失ったものが、輝いて見えるのはどうしてか? 243

6話

天地自然は「近代化」させることができるのか？

247

7話

「農の原理」を語ってみる

251

おわりに

あなたと天地自然は

農と生きものと食べものによつて
つながっている

258

百姓・字根豊と
考える農の哲学



A-は百姓になれるか

字根豊

百姓の感覚と考え方を 伝えたい

この本は、あなたがこれまで学校で習ったり、本で読んだりしたこと、ネットで探してみたこととは、かなり違うと思います。「農」を見つめるまなざしと、疑問の持ち方が違うからです。だからいいのです。一般的な常識や定説には背を向けて、百姓としての私なりの答えをあなたに伝えます。なぜ他の「農業専門家」と、私はこんなに違うのか、それは読み進めると次第にわかってくるでしょう。

私は農家の長男として生まれ育ちました。中学生の頃までは百姓を継ぐつもりで農業高校に進学する予定でした。しかし、父のやり方がどうも好きになれなかったのです。父は稲作と養鶏から、田んぼを埋め立てて鶏舎を増やし、養鶏専業にしました。それまでの平飼い養鶏の時には、病気の鶏は別に隔離して、特別の餌と水を与えて、しっかり様子を見て、元気になると元に戻していました。と

ところが近代的なケージ飼いになると、弱った鶏はすぐに処理場に持って行って殺します。

農業は進歩していくと、生きものを生きものらしく扱わなくなるのはどうしてだろうか、と考えるようになりました。短歌が好きでしたが、中学3年の時に詠んだ歌の大半は、鶏の「死」ばかりでした。幸いにしてと言うか、不幸にしてと言うか、父の大規模経営は破綻し、倒産してしまいました。父は才覚のある人で、数年後には再建しましたが、もう私に後を継ぐとは言わなくなりました。

私は大学に進み、農業指導員になり、40歳でふるさとはない福岡の糸島の地で百姓になりました。田んぼを耕作するようになって、小さい頃の田んぼがよみがえった思いでした。鶏も生まれたばかりの雛を孵化場に買いに行き、子どもと一緒に家の中で育て、平飼いで10羽飼いました。妻は非農家の出身ですが、野菜を育てるのが好きで、見よう見まねで百姓をしてきました。

大学は農学部でしたし、農業指導員は自然科学の知識を用いて百姓を指導します。だから私は自然科学が大好きで、科学的な思考が身についています。ところが農業指導員になり、百姓とつきあうようになり、さらに自分でも百姓するようになって、科学とは違うとらえ方あることに気づいて、しばしば感動しました。なぜこのように科学とそうでない方法という二つのとらえ方があるのでしょうか。

科学は新しい方法です。では、科学がなかった時代はどうだったのでしょうか。自然や、田畑や、生きものの別のとらえ方があったわけです。これが引き継がれているのです。

それからというものの、私はこの二つの方法をいつも意識して、「これは科学ではわからないはずだ」というように比較してきました。この本の最大の特徴はここにあります。科学の「学知」と百姓の伝統的な「野の知」をつきあわせながら、科学だけが正しいという俗説を打ち破っていくつもりです。

私はこれまで、「変わってるな」とよく言われてきました。根は真面目なので、「なぜ人は、こんなことがわからないのだろうか」といつも思っていました。なぜだか着眼点や思考法が人とかなり違うのです。

私の話すことは若い頃から「宇根節うねふし」と、なかばからかわれてきました。しかし、宇根しか言わない、宇根ならでは語りだ、宇根だからこそ語れる、という賛辞も少しは含まれていることも知っていました。つまり、普遍性や客観性よりも「個人的な見解」が出すぎているという意味なのです。それは「宇根の思想・哲学」と言われることはなく、「個人的なユニークな意見」と受け取られてきました。それは少し悔しいところでしたが、「それでもいい」と思っていました。「誰かの真似だ」と言われるよりもはるかに嬉しいことだからです。

なぜ私が異端かは、自分ではなかなか分析しにくいものです。しかし、この歳になって、その理由もわかるようになりました。だからこそ、この本を書こうという気持ちになったのです。私なりの考え方をしっかり披露しておきたいと思うようになったのです。

「そういう特殊な、特別の考えの人の本を読むと、農の見方が偏ってしまうのではないかな」と心配になりませんか。この本を読もうとしている人は、もうすでに相当に「農」の常識というものを身につけているはずです。だから、私の書いた内容に「えっ、そうなの」「そーなんだ」「そうだったのか」「うーん、信じられない」と感じながら、読み進めていくはずです。それこそ、私と対話が成り立っている証拠です。これまで経験したことのない刺激的な対話になることは保証します。

もちろん、「宇根さんだけの見解、解釈だな」と思われるところも少なくないでしょう。そこに気がつくということ自体が、すごいことなのです。これでも単なる「個人的な思いつき」だとは思われないような工夫はしています。普遍性は求めませんが、多くの人のまなざしの底でつながる「共通性」を求めています。

そのためには「共感」が得られるかどうか大切です。大げさに言うなら、私の人生を反映した語りになっているかが、説得力があるかないかの分かれ道だと自

覚しています。

そのためには、こうして語っている自分の言葉に横で耳を傾けているもう一人の自分がいて「その程度じゃ、納得してもらえないよ」と叱咤してくれることが必要です。指導員をやめ百姓になって、人と話すことが減った反面、自分との対話が格段に増えました。考えることが好きな私としては、とても有り難いことです。この本では、さらに読者のあなたが、話し相手として目の前にいるのです。

私の青年時代の目覚めを語りたい

「減農薬」という言葉はなぜ生まれ、 なぜ広がったのだろうか？

まず、私の自己紹介を兼ねて、青年時代の思い出を語ります。「減農薬」という言葉を耳にしたことはありませんか。「農薬を減らした」農産物だ、という使われ方をしています。この言葉は私たちが使いはじめたのです。もう半世紀も前のことです。新しい言葉が社会の中に広まっていくことは、それを言い出した本人にとっては嬉しいことです。新しい言葉は、新しいことを表現するためにつくられ、使われるのですから。しかし、この「減農薬」という言葉は、もともととはどういう意味だったのでしょうか。

「減農薬」は結果ではなく、「農薬を減らしていくんだ」という百姓の決意を表現するために使いはじめました。農薬をむやみに散布させる「農業指導」と、その指導に従うばかりの百姓の「農業技術」を変えるんだという運動のスローガンだったのです。この言葉に込めた熱い思いを思い出すたびに、今日の「減農薬」の使われ方に、「そんなもんじゃなかったのに」と私は思います。

1973年に、私は大学を卒業して福岡県の「農業改良普及員」になりました。農業試験場の研究員になりたかったのですが、全く自信もないのに、百姓を「指導」する「指導員」をや

らされたのです。もちろん当時も現在も大学を出たばかりの若造に経験豊富な百姓の指導ができるはずがありません。そこでやるべきことは二つでした。

まず、先輩指導員（農協には営農指導員という指導員がいたので、彼らも含めます）について回って、指導の身を身につけ真似することです。先輩たちの「指導」の核となっているのは、「科学的な情報・知識」でした。農業試験場や農学部などで研究された成果・知見です。これを活用すれば、百姓経験がなかった私でも、一応の情報提供はできるようになっていきました。百姓も、こうした新しい知見は求めていましたから、私も研究機関の研究報告や専門書を読みあさり、さらに先輩たちがそれをどのように取捨選択して、百姓相手の講習会で披露しているかを学びました。

二つ目は、先輩たちは情報の提供だけでなく、百姓と会話することが上手でしたので、その態度を身につけるようにしました。百姓が何を求めているのか、そのために指導員は何をしたらいいいのかをつかむためには、これはとても大切でした。しかし、やがてそういう「指導」のための会話ではなく、いわゆる世話話、雑談、思い出話そのものの面白さに、私は惹かれるようになってきました。

ここには、農業を進歩・発展させるための「指導」とは、次元の違うやりとり・交流・意見交換があることに気づいたのです。一人ひとりの百姓の生き方の魅力は、この次元の話になります。この次元では、指導員の生き方や個性や農業観もまた問われることになります。「指導

員」の仕事の喜びは、「指導成果」よりも、こちらの庭に咲く花のようなものです。早くこのことに気づいてよかった、と思っと思っています。指導員になって5年目に「来年は農業試験場に転職しないか」と打診を受けましたが、「有り難いけど、普及員のほうが面白そうなので、このまま続けます」と断りました。

しかし、私には大きな悩みが一つありました。大学の在学中にもっとも感動した本は『苦海浄土』（石牟礼道子）でした。ふるさとの島原半島の言葉に似た天草弁で書かれていることもあって、一挙に「環境問題」の広さと根深さに目覚めました。折しも農業による食料汚染、母乳汚染、環境汚染が次々に明るみになって、農業はこの問題に向き合わなければなくなっていたのです。私は昆虫学を専攻していた友人たちの影響で、IPM（総合防除、29頁参照）の考え方を広めねばならない、という考えを持って社会に出たのです。

ところが、私は農業を減らす「指導」も、当時すでに少数派ながら始まっていた有機農業を広げる「指導」も全くだきませんでした。そういう「指導」は、県庁でも、農業試験場でも、普及所（現普及センター）でも、農協でも、役場でも全くだきなわれていなかったからです。先輩たちは、「農業をふらせる」指導しかしていませんでした。当時は（現在もまだまだ）農業散布は虫がいてもいなくても、「防除ごよみ（スケジュール）」に記載してある時期に、記載してある農業を村中に一斉に散布させていました。「防除ごよみ」は県が指示したモデルに基づいて作成していたのです。

先輩のやり方に巻き込まれずに、自分でやればいいのですが、そういう能力もなく、そういううきつきかけもありませんでした。この時代の中で、百姓や先輩たちの後を追いかけて、楽しく時を過ごしていけばそれでいいのだろうか、とひとり悩み続けていたのです。

そこに若い百姓が現われたのです。八尋幸隆さんは私より2歳下の大学の後輩ですが、すでに学生の頃から百姓もしていました。彼が大学を卒業して本格的に就農したのが、私の受け持ちの地域でした。そこで、よく話をするようになりました。そして1976年だったと思いますが、こう言われたのです。「宇根さん、あなたたち普及員は農業をふらせすぎる。オレはこれまで普及所の指導の3分の1以下で済ませてきた」と。

これは、驚きではなく、うすうす私も気づいていたことでした。そして、八尋さんは続けてこう言ったのです。「オレも野菜は有機農業でやっているけど、稲作もできるだけ早く無農薬にしたい」と。そこで私は、思い切って提案しました。「どこまで、農業を減らせるか、あなたの田んぼで試験してみよう」。

翌年、八尋幸隆さんの田んぼ3枚を、①慣行とおりの農薬散布、②慣行の半分、③無農薬、の試験研究田にして、当時は試験研究機関もやっていなかった研究に取り組んだのです。人との出会いほど人生を変えてしまうものはありません。「そういう研究は、普及員や百姓がやるものではない」という批判も、後になって、農水省や県庁や試験場からしつこく言われましたが、すでに「減農薬」の実践は、古い比喻ですが「燎原の火のように」広がってしまってい

ました。

なぜ「無農業」ではなく、「減農業」だったのでしょうか。八尋さんの苦言「指導員は農業をふらせすぎる」ということは、ほとんどの百姓も感じてはいたのです。それを口にしなかったのは、「指導とはそういうものであって、実際の田畑に適用するのは百姓の判断だ」という習慣からでした。だから経験の浅い指導員も存在できたのです。しかし百姓だって農業散布の判断はなかなかできないで苦労していたので、指導を鵜呑みにせざるをえない現実があったのです。つまり農業散布については、その程度の「技術」であり、その程度の「指導」しか行なわれていませんでした。

ここで、私の師であった百姓・山下惣一さんが、当時の私に抱いた感想を大事な証言として引用しておきます。

「『農業をまけという指導は机の前に座っていてもできるが、まくなという指導は一枚一枚の田んぼを見ないとできません』普及員になったばかりのペイペイの若僧がこういったのである。『すごいことを言う奴がいる』これがオレにとっても宇根サンの第一印象だった。（中略）そんな時代に『田んぼの虫の状態を見て農業をまくべきだ』と若い普及員がいいだしたのだからおおごとだよ。要するに『お上の指導』に内部の職員が異議を唱えたわけだ。当然内外から圧力がかかる。宇根サンもがんばったが、まわりの百姓たちも懸命に彼を支えた。まさしく減農業は『コロンブスの卵』だよな」（『百姓の遺言』2023年、家の光協会）

「減農薬」が衝撃的だったのは、それまでの「指導」を根底からひっくりかえし、「技術」のあり方をきびしく問い詰めたからでした。

ただでさえ必要以上に農薬を散布させる「多農薬」の指導が蔓延していた現状に、「減農薬」運動が、提案した根本的で具体的な「対案」とは、二つです。

①田んぼは、一枚一枚個性的なのだから、自分の田んぼは自分で見て、自分で判断するしかない。②どれくらいの病害虫の発生なら、農薬は必要ないかの目安もまた自分の田んぼで「散布をひかえて（無農薬にして）」確かめるしかない。

そして、「自分で見て、自分で判断する」『農具』が仲間の百姓・篠原正昭さんによって1978年に発明されたのです。この農具を私は「虫見板」と名づけました。その後1983年に福岡市農協が全組合員3000戸に配布したことにより、百姓自身が手元に置くものとなり、西日本各地に広がっていったのです。

ここで、「虫見板」と並んで、減農薬運動を広めたもう一つの「道具」を紹介しておきましょう。私は減農薬こそ、百姓が求めているものだとは確信した34歳の時に『減農薬稲作のすずめ』を自費出版しました。4000冊を、夫婦で半年で売り切りました。読み手が待っていたと確信しました。その後、この本はリメイクされ農文協から『減農薬のイネづくり』として出版され、減農薬運動は、全国に広がることになったのです。それからです。私にとって「本」を書くことは、読者に向けて「伝える」ための仕事になりました。

「虫見板」^{むし みばん}の発明と驚き

写真 虫見板を使う

「虫見板」は単なる調査道具ではありません。使う人のまなざしを、遠くまで伸ばし、拡大し、田んぼ全体に広げ、さらに虫の大きさまで縮小させることもできます。ようするに、使う人の「眼」になるのです。使った人は例外なく「えっ、こんな虫が、こんなにいるの。初めて見た」と言います。まるで「魔法の板」と言ってもいいでしょう。

「虫見板」の使い方は、とても簡単です。写真のよう
うに、虫見板を稲の株元にあてて、反対側から手の
ひらで、素早く3回ほど叩きます。落ちてきた虫を
そおと引き上げて、顔を近づけて見るのです。私
たちは「じっとしているのが害虫で、動き回るの
が益虫だ」とすぐに気づきました。害虫はじっと稲
にしがみついているれば、生きていけますが、益虫は
動き回らなくては仕事になりませんからね。しかも、
見終わったら、虫見板をズボンでポンポンと叩くと、

またまっさらな状態に戻り、何回も何回も使えるのです「写真」。

虫見板がなかった頃は、百姓はどうやって虫を観察していたのでしょうか。大発生の年には、株元でも目につきますから、うすうす気づきますが、通常はほとんど見る技術すらなかったのです。せめて稲株を叩いて、水の上に落ちた虫を見るのが精一杯でしたが、虫はすぐに跳び上がって、稲に戻ってしまいます。

減農薬を始めた私たちは、当初は直径が50cmもある捕虫網を折りたたんで、斜めにして端を稲の根元につけて、反対側から叩いて、網に落ちてきた虫を調べていたのですが、とても見にくく、しかも捕虫網は1本しかなかったので、各自が使うわけにはいかなかったのです。

あるとき田んぼを見て回る減農薬稲作研究会に、メンバーの篠原正明さんが四角の針金の枠に黒い学生服の古布を張ったものを持ってきました。私たちはすぐに「ああ、捕虫網の代わりだな」と気づき、おのおのが使ってみると、とても見やすいのです。そこで研究会が終わると、早速薄い合板を買ってきて、30cm×20cmの大きさに切って（この大きさだと稲と稲との株間にちょうど入るのです）、取っ手をつけて、ついでに見やすいように、黒くペンキを塗って「観察板」を各自が持つようにしました。この板に「虫見板」と名づけたのは、私でした。

やがて「虫見板」は農文協から販売され、NPO農と自然の研究所に引き継がれて2010年には販売枚数が20万枚を突破しました。現在では、田んぼの「生きもの調査」や野菜、お茶の「虫見」にも使われています。

「虫見板」はまるで別の世界の扉を開いてくれます。畦から（外側から）見ていてはわからない世界が稲のまわりには広がっています。それを稲に「覗いてもいいかい？」と許しを得て、まるで切り取って手元に広げよう的なものです。稲が生きている世界の内側から見つめるようなものです。この不思議さは、生きものたちの劇場の幕が虫見板で開くからでしょう。

2話

なぜ「減農薬」は百姓からは歓迎されたのに、
農水省からは嫌がられたのか？

1992年になって、あれほど「減農薬」に批判的だった農水省が「減農薬」を用語として採用したいと言いはじめました。「減農薬とは、慣行の農薬散布の2分の1以下を言う」と定義して使いたいと言うのです。「減農薬」の提唱者だった私は反対しました。「減農薬」とは、散布回数を示すものではなく、その人の姿勢（思想）を表わすものです。まわりが農薬を散布する中で、散布しないでじっと様子を見続けた百姓の心根は、散布回数で表現できるものではありませんし、もっと豊かなものがあります。

そこで、「減農薬」という言葉自体の歴史を遡ってみましょう。この言葉はとても不思議な着眼から生まれ落ちたのです。農業改良普及員になって、4年目に桐谷圭治さんと中筋房夫さ

んの『害虫とたたかう―防除から管理へ』（1977年、NHK出版）を読みました。内容は総合防除（IPM）[*]を理論的にしかも実践的に説明した説得力溢れる本でした。「減農薬」という言葉は見出しとして出ているだけで、内容の説明はありません。ところが、終盤に差し加かって、桐谷圭治さんらしい一言がぼろっとこぼれ落ちているのです。

「現状では、個々の農家が防除の要否を判断できるところまでは程遠い」

この一文で、私にはこの本の眼目は「減農薬」にあると気づいたのです。私たちは、一生のうち人生を揺さぶるような本の何冊かに会おうものです。たぶん、多くの読者はこの部分を読み流したでしょう。私は、この一節に桐谷圭治さんの悩みと、思いの深さがあることに気づいたのです。

すでに、私には百姓には自分自身で防除が必要か不要かを判断できない本当の理由がわかっていました。そもそも百姓が判断する「技術」も「道具」

もなかったからです。「よし、それを百姓とともにやってみよう」と、私は決心したのです。桐谷圭治さんが真に求めているのは百姓たちによる「減農薬」だということをうかんだのです。そして私たちの研究と実践を「減農薬稲作」と名づけ、「減農薬運動」を開始したのです。

田んぼの虫たちの出方が、一枚一枚異なることは、虫見

*『総合防除（Integrated Pest Management：略してIPM）』とは、農薬やそれ以外の防除法の農生態系内外への影響を最小限に抑えて、栽培法の工夫や、天敵の活用や、あらゆる農法を適切に使用して、病害虫を被害を出さないレベルにしてしまう管理システム」を指します（傍線部分は、桐谷さんが追加した項目ですが、現代でも軽視されています）。